

幼児の教育について

—R. シュタイナーの教育思想に基づく—考察—

渡 辺 優 子

A Study on the Infant Education
based on R. Steiner's Idea
by
Yuko Watanabe

I. はじめに

近年、幼児教育の重要性は、だれもが認める所であるが、その方向は様々なものがある。片方には、芸術、体育、知的内容（文字、数、外国語）等の早期才能教育があり、他方には子供の自発的活動を重視する、自由保育的な流れの教育がある。不思議なことに、両端と見えるものが、それぞれ、人間教育であり、感覚教育であり、情操を豊かにすると謳っている。この、人間教育、感覚教育、情操教育とはどのようなことを述べているのだろうか。

一方、近年、登校拒否、非行等の子供達の問題行動が社会問題となっている。これらの原因の1つとして、乳幼児期からの養育、発達過程に問題点があるとの指摘もされている。

又、平成元年には幼稚園教育要領が、平成2年には保育所保育指針が改正され、幼児の主体的な活動を促す環境作りが重視されるようになると、現場では、自由保育か一斉保育か、やらせであるかないか等の議論が起っている。

百花繚乱のような現状であるが、ここで、幼児教育に関わりを持つ者は今一度、乳幼児の人間教育ということを考えて見る必要があるのではないだろうか。

私は、R. シュタイナーの人間観、教育思想の持つ、抱括的で、イメージ豊かな視点が、大きな意味を持つのではないかと思う。R. シュタイナーの思想と、現実の幼児の行動とがどのような関連を持っているのか、考えてみたい。

II. R. シュタイナーの幼児教育思想と、現実の幼児の姿との関連について

R. シュタイナーは「精神科学の立場から見た子供の教育」に於いて、幼児の教育について次の様に述べている。「⁽¹⁾人間は誕生の瞬間まで、母親の物質的な母胎に包まれているように、歯の生え替わり、即ちほぼ七歳頃まで、エーテル的母胎とアストラル的母胎によって包まれている。歯牙交替期中に、初めてエーテル母胎はエーテル体を分離する。更に性的成熟に至るまでアストラル母胎は存続する。……⁽²⁾七歳頃の歯牙交替期に至るまでの人間の肉体は、人生の他のあらゆる

る時期の課題とは本質的に異なった課題を遂行せねばならない。この時期に肉体は特定の形体を得なければならない。肉体的諸器官の構造関係は、特定の方向や傾向を身につけなければならない。……子供がどのような方法で自分を取り囲む環境と関係を結ぶようになるかを示す適切な言葉が二つある。それは「模倣」と「模範」である。……⁽³⁾物質的環境世界に生じることを子供は模倣し、模倣行為を通して子供の肉体諸器官はその形体を作っていくのであり……物質的環境という言葉は考えられる限り広い意味に解釈されなければならない。……ただ子供のまわりで物質的に起こっていることだけではなく、子供の環境内で起こっていること、子供の知覚すること、物質的領域から子供の精神的諸力に作用しうることのすべてが含まれている。……想像力の働きは、脳の形態を作り上げる営みに形式的に参与する。……⁽⁴⁾生命のない、数学的な形体からできているにすぎない玩具は、すべての子供の形成力に対して荒廃的で抑圧的に作用する。それに反して、生命あるものを思い浮かばせるようなものはすべて、正常な作用をする。」

以上のシュタイナーの文章は謎めいて聞こえる。読む者はその謎を解こうと努力しなければ、なにも見えてこない。

まず、幼児は肉体があって、その他の本質（エーテル体、アストラル体、自我）は肉体を包み、外から作用しているということは、大人と幼児の存在の仕方の違いを示している。大人は、すべてが自分の中にあり、自分と他をはっきり分けて意識している。幼児は、自分が肉体の外にある。自分という意識が薄く、自分と外界が一体となっており、外界の中に自分を見ている。特に乳児期にその傾向が強い。生後数週間の乳児でも、優しい声を聞き、優しい顔を見れば、うれしそうな表情を浮かべる。乳児自身がうれしいという感情を体験しているというよりも、優しい大人が乳児自身であるという直接的な反応のように見える。又、乳児は自分の前で手を振ったり、指をなめたりして、不思議そうな顔をしている。自分の肉体が、自分の外にあり、それを確認しているようである。3才頃までの幼児は、自分と母親を一体のものとして感じており、「ママは〇ちゃんて〇ちゃんはママなの」などと主張することもある。幼児は、周囲の環境と一体化するほどの全幅の信頼感の中で生きているが、環境と肉体を結びつけるのが感覚であり、感覚を通して肉体が作られ、体を動かすことができるようになれば、模倣という行動様式で、周囲のものを自分に取り込んで行く。

感覚は、五感とも言われ、視、聴、臭、触、味があげられるが、シュタイナーは、これに加え、⁽⁵⁾熱感覚、均衡感覚、自我感覚、思考感覚、言語感覚、運動感覚、生命感覚の12感覚を上げている。これらの感覚は1つでも働くが、共同で働く。シュタイナーによれば、見ることの中には、視覚と運動感覚の両方が働く。視覚で色彩を、運動感覚で形をとらえ、二つの感覚が共同して見る行為が成立するという。音楽を聴くことの中にも、多くの感覚が働いている。音色からは色彩が感じられる。リズムには運動感覚が、音程には思考感覚が、形式には均衡感覚が働く。作曲者の意図を感じる時には思考感覚が、作曲者や演奏者の人間性を感じる時には自我感覚が働く。和音の響きに熱を感じる時もある。シュタイナーによれば、言葉を聴くことの中には聴覚と言語感覚と思考感覚が働いているという。聴覚で音を聴くことは、その音の本質を聞くことである。言語感覚は、幼児においては言葉の響きを感じ取る所から発達が始まる。言葉の意味を感じるのは思考感覚の働きによる。幼児はいろいろな音を発声しようと試み、次には、言葉の意味、形式等を直感的に理解し、自分で言葉を発声しようとする。言語感覚は、こうした過程すべてに働いている。思考感覚は思考そのものではなく、相手の思考を感じとる感覚であり、言葉の中にも働くが、人の身振り、表情、ものの形などにも働く。自分で思考できない幼児も、思考感覚は働かせている。熱感覚は触覚と同じではない。触覚と共に働くが、暖かい雰囲気や冷たい雰囲気等を感じる基となる。シュタイナーは、視覚について、事物を手でつかむに似た、意志的な働きをす

るものであると述べている。大人でも、初めての物を驚きを持って見る場合に、そのような働きが生じるが、特に幼児にとって、視覚は意志的である。

感覚は発展して行く。触覚は手ざわりや、包み込まれている感じを感じる所から、快、不快、安心感、不安感の基盤を作る。運動感覚は、自分が動いていることを知覚する所から始まり、形を知覚する時に働く運動感覚は、形に働くエネルギー等を認識する方向を持ち、リズムに働く運動感覚は、世界のリズムやその中で自分の行き方のリズムを感じるまで働く。生命感覚も、自分の体調を感じる所から、自分の生き方がこれで良いのか悪いのかを感じる基盤を作る。均衡感覚は、直立歩行の際に強く働くが、世界に向かって立つという意識を生じさせ、自分の力でバランスよく立つという生き方の基となる。臭覚も、臭いをかぐだけではない。家々は皆違った匂いがすると言った子供がある。匂いは、普通は強い感情を引き起こすが、感情を通して認識へつながる可能性を持つ。

⁽⁶⁾シュタイナーは、感覚が働く基盤には共感と反感の作用があると述べている。感情として共感、反感であるが、意識状態としては、眠りと目覚めとして、体の反応としては、息をはく、吸うのリズムとして現れる。眠りと目覚めは、目がさめている時の意識状態として、眠ったり、目覚めたり、夢を見たりすることを言う。反感-目覚め-吸気の系列は、表象を生じさせ、表象が強まるとそれは記憶に変化し、最後には概念となる。共感-眠り(夢見)-呼気の系列は根本的には意志が作用しており、想像力が生じ、形象作用が生じる。この形象作用により、外界を意識化することができる。

乳幼児期は、共感の強い時期である。幼児は共感の中で眠り、夢みている。共感の中で諸感覚を働かせているのだが、この幼児の感覚は、大人の感覚とは違っている。もし、大人が幼児の感覚を働かすことができたなら、世界はこれまでとは違った輝きの中に姿を現すだろう。幼児の感覚でとらえられた世界は、夢見るような意識の中で、想像力を引きおこし、形象作用によって意識化されるが、意識の表面へは上ってこずに、無意識へ沈んで行く。そして、肉体を作り上げる力に変化する。乳幼児期の記憶が長く残らないのは、この作用のせいである。無意識に沈んで行ったものは、体の中に、心の働きの基盤の中に、刻印づけられて行く。

この共感、眠りの意識を無理に目覚めさせてはならない。いろいろな生活のリズムの中で、幼児が生活し、感覚を働かせ、動き、言葉を覚える等の中で、少しずつ目覚めて行くものである。

幼児期にも記憶は生まれるが、特定の場所や物についての記憶だったり、習慣化されてリズムを持ったものに対する記憶が主である。3才頃より、自分の体験したことに対して、記憶力が強くなり、それを言葉で表現するようになる。表象—概念—記憶の系列が少しずつ現れるが、判断を共なわない、具体的な記憶である。

認識も幼児は持つが、これは抽象的な作用による認識ではない。共感の中で感覚を働かせ、豊かなファンタジーの世界を作り出し、そのファンタジーの世界を生きることによって生まれた直観が幼児の認識である。幼児は自分の直観を言葉や、絵や、動作等の遊びの中で表現しようとする。幼児は表現することによって、心と体に深い満足感を持つ。その直観は記憶に残らず、幼児を生長させて行く力へと変化して行く。

⁽⁷⁾津守真氏は、幼児が世界の両義性を描画の中で表現していることを、何年にも及ぶ研究で明らかにされている。兄弟姉妹の真中に生まれた子供が、自分の思うようにしたい気持ちと、思うようにならない現実の両面性を、枠に沿った線と自由な曲線、渦巻きと直線、十字架、天使と悪魔等、年齢に応じた書き方で表現している。とても深いイメージなのだが、子供はこれを遊びとして表現し、描き終れば満足して他の遊びに入っていく。周囲の大人が理解してやらなければ泡のように消えてしまう表現でありながら、無意識の中に、子供本人の生きる方向性がはっきりと示

されている。

⁽⁸⁾津守氏は、同じ著書の中で、泥んこ遊びを通して、自分の排便の問題を解決する子供の姿や、ジョロにつめた砂を水で洗い流す行為から、自分の内的な状態を変化させようとする子供の姿を描いておられる。外界の物（泥水やジョロ）と自分との、ファンタジーを通しての一体感を通して、自分が成長するための課題解決への直感が働いている。

子供は遊びの中で、周囲の世界から受取った豊かなイメージの世界を表現する。子供が人形で遊んでいる時、その人形は子供の家族であったり、友達であったりするが、根本的にはその子供自身なのであり、自分が体験したことや、自分の願いを表現する。ただかけ回ったり、とびはねたり、とび降りたりしている時も、種々の感覚を通してファンタジーが生まれている。運動感覚1つを取っても、左右、上下等の方向性、スピード感、リズム感、他の人の動きとの調和等を感じることができるし、気持のよさ、空気、風、光、大地、暖かさ等、いろいろなイメージが生まれている。友達と一緒に楽しさは倍になり、互いに真似をしあい、連帯感の基礎が生まれる。そして、幼児の活動を好ましく見ている大人を感じる時、自分が肯定されている深い喜びを感じることができる。外界と結びついている幼児にとって、肯定的な自分を外に見ることとなり、世界に対する信頼感が育つ。

外界と自分が一体である幼児にとって、模倣衝動は根本的な生き方と言ってよい。良いものも悪いものも、周囲にあるものを信じて真似をし、自分の行動様式にしてしまう。

はったり、座ったりできるようになり、自分の体が少しずつ自由に動かせるようになると、模倣行動が表面に現れる。最初は、周囲の大人や子供の行動を直接真似ようとする。おもちゃよりも台所用品を振り回すことを喜んだり、年長の子供の遊びに入ろうとして邪魔にされたり、自分が食べさせてもらっている食物を大人の口につこんだりする。猫や犬などのペットがいると、その真似をして歩いたりもする。

言葉も、最初は口びるの動きを模倣することによって身につけて行く。単語を覚え、動詞、形容詞、助詞等の使い方を覚えると共に、周囲の大人の言い回し、語調等も敏感に模倣する。自分が叱られると、その通りの言い方を人形や、家族に言ったりする。このような時、言葉でいくら叱ってもしつけは全然できず、子供は怒り方を覚えるばかりである。

模倣行動は次第に直接的な模倣から、ごっこ遊びに代表されるように、想像を伴った遊びとして発展して行く。母親のように直接料理はできないが、いろいろなものを料理の材料や調理道具に見立てて、母親そっくりなやり方で料理し、お客をもてなす。そこには種々の感覚が働き、ファンタジーが生まれている。家庭の中の模倣から始まり、普段目にするいろいろな仕事をする人達の模倣や、幼稚園での生活の模倣へ発展して行く。又、現実の生活だけでなく、お話や絵本、テレビ等の世界を遊びの中で表現し、友達との関係の中でファンタジーの世界を広げて行こうとする。その中で、他人の自我を感じる自我感覚が芽ばえるのを見ることができる。乳児期には、他者は自分であるという直観で、他人の本質を感じている。次には模倣行動を通して自分が両親や家族であるかのようにふるまう。5、6才になれば、友達同志でいろいろな役になって遊ぶことで、役のイメージを生きる。幼児はそのことで、自分の心にある多様なイメージを表現する。幼児は時に暴力的になったり、甘えん坊になったり、普段大人から否定的に見られている性格を表現したり、憧れている人物になったりもする。⁽⁹⁾シュタイナーは自我感覚について、人と人が出会った時、眠れる意志の中で、共感と反感が早いテンポで交替する時に働くと言う。幼児は反感の力がまだ強くないので、模倣行動を通していろいろな役割、性格を再現し、認識しようとしているようである。自我感覚は、時間をかけて発達して行くものであるが、夢見るような意識の中で、いろいろな役を表現する幼児のごっこ遊びの中に、発達の一段階を見る。

おもちゃに関して、シュタイナーは、生命を感じさせるものや、想像力を働かせる余地のあるものが良いと述べているが、この言葉にはどのような意味があるのだろうか。

現代の日本では完成されたおもちゃや、プラスチック等の生命のないおもちゃが多い。本も、美しく個性的なものも多いが、知能テスト的なものや、文字、数、英語等の指導を意識して作られたものも多い。テレビ、コンピューターゲーム、各種の電子楽器も普及している。シュタイナーの言う、子供の形成力を荒廃させるおもちゃでいっぱいであるが、子供は一見、これらのものを文句も言わず受け入れ、喜んでいるように見える。ファンタジーの豊かな幼児は、生命のないおもちゃも生命化する。テレビの主人公になったりするし、完成された人形でもごっこ遊びは成立する。しかし、ファンタジーの弱い幼児は、テレビを見る時に苦痛に近い表情をしているし、複雑なおもちゃは、ただ組み立てるだけでその後の遊びにはつながらない。ファンタジーの豊かな幼児の遊び方は、テレビや、完成されたおもちゃを前にしても、幼児の遊びの特徴を失わない。テレビの主人公になるのは、幼児の遊びの永遠のテーマである変身そのものである。豪華なままごとセットや人形も、最初は決まった遊び方の通りにやるが、次第に幼児らしい遊び方に変わる。自分のイメージに合った物を選び出し、思いがけない使い方をしたりもするし、似た物を自分で作って遊んだりもする。これらの姿を見る時、幼児の本来の姿は、テレビや、豪華なおもちゃがなくても遊べる所にあるのではないかと思われる。子供がテレビを見ない時は、片時も退屈する暇がないかのように、体を動かし、作ったり、遊んだり、大人に話しかけたりうるさいものである。幼児は常に感覚と体とファンタジーを働かせているものである。テレビを見て静かにしているのは、本来の幼児の姿には合わないのではないだろうか。又、生命を感じさせるものと、生命のないものの違いを、大人は感じ、考える必要があるのではないだろうか。

土、砂、海、植物、動物等の自然の物に向い合った時、大人でも深い満足や、懐しきを感じるものである。それらの物に感覚を開いて行く時、心の底に届くような安心感、暖かきを感じる。幼児と一緒に居ると、植物は普段の何倍も生き生きと輝き、一匹の虫でさえ、いとおいしいものになる。幼児の前で自然が本当の姿を表わす。

シュタイナーは、自然に、人間の肉体に、又、~~発~~展して人間の気質や記憶に働きかける形成力をエーテル体と呼び、動物や人間の快、不快、欲望、情熱等の担い手をアストラル体と呼んでいる。7才までの幼児は、肉体はあるが、エーテル体、アストラル体、自我は肉体を外から包んでおり、7才になってエーテル体が、14才になってアストラル体が自由な活動を始めるとしている。

幼児は共感の中で、エーテル的形成力やアストラル体、自我を自分の外に感じていて、無意識的に、そういう世界に向き合っているのではないだろうか。幼児と生活する中で大人は、忘れてしまったエネルギーで根本的な法則的な世界(神話の世界と言ってもよい)を見出し、幼児が根源的な世界の住人であるかのように見えるのではないだろうか。小石や木片にも、又、人間の活動を感じさせる様なおもちゃにも、幼児の成長を助ける力が働いているのではないだろうか。

III. 幼児教育の現状に対して

現在の種々の早期教育は、幼児の感覚や模倣行動にうまく働きかけているが、幼児が無意識に感覚を通してつながっている広い世界をせばめてしまうことになりかねない。音楽、絵画、体育等は、深いイメージの教育には欠かせぬものであるが、幼児の衝動とはかけ離れた技術教育へ向う危険性がある。幼児は芸術の世界へ直接かかわろうとする。その意志は尊重されなければならない。文字、数等の早期教育は、幼児の感覚を知的なものへ方向付け、幼児が本来持っている広い世界から幼児を切り離す。そして、幼児の共感の世界に反感を流し込む。それは、幼児の成長

する力を少しずつ奪い取ることにならないだろうか。

テレビ等の人工的な映像や音の世界も、幼児の感覚にそぐわない面がある。しかし、早期教育にしても、テレビ等にしても、現代を生きる者は、これらのものを全面的に否定はできない。幼児はそれらの力にさらされて生きている。周囲の大人が意識的に向うことが必要ではないだろうか。

⁽¹⁰⁾平井信義氏は、登校拒否等の研究から、乳幼児期からのスキンシップの必要性、自主性の発達、思いやりの気持の大切さを説いている。スキンシップを通しての母子関係の確立、いたずらや反抗を通しての自主性の発達等の上に、友人関係が育ち、思いやりの心が育つとしている。スキンシップを通し、世界との一体感や暖かく安らかな感覚の満足が、発達のベースを作る。感覚を通しての探索行動や模倣行動が、いたずらとなって表われる。反抗期はその子の自我が働きかけを始めた記念すべき徴候である。

⁽¹¹⁾カール・ケーニッヒは反抗期について次の様に述べている。幼児が言葉を獲得し、記憶力が目覚め、ファンタジーが発達すると、思考力が目覚め、幼児は自分を意識し始める。その時、高次の自我が目覚める。その結果として反抗期が始まるとしている。それまでは、共感と一体感の中で夢見ていた幼児が、反抗期と共に、自分と外の世界の分離を感じ、少しずつ反感を働かせ外の世界と自分の結びつきを自分の力で作って行こうとする。自立心と共に、不安等の感情も激しくなって来る。この時期の大切さを周囲の大人が考えて、暖かく受けとめることが大切であろう。又、友人との遊びを通し、他の人とファンタジーを共有する楽しさを知り、信頼関係が育って行く。思いやりの基本には信頼関係とファンタジーがある。平井氏の指摘の根本には、幼児期の感覚、自我、ファンタジーの発達があると言ってもよいと思う。

保育現場での自由保育か、一斉保育か等の問題も、周囲の大人の意識の問題である。幼児の成長に大切な環境を与えるのに消極的になる必要はない。ただ、幼児の成長を基本に考えて行くことが必要であろう。その時、シュタイナーの人的成長への観点は、大きな示唆を与えることになる。

IV. 終 り に

幼児は共感に満ちた、夢見るような意識の中で、周囲の環境にあるものを感覚を通して受け取る。その感覚の働きは、意志的であり又、繊細である。共感の中で形象作用が生じ、ファンタジーが生まれる。幼児は深いイメージの世界を生き、周囲を模倣する。模倣行動やファンタジーから幼児は直観を得るのだが、それは記憶に残らず、無意識に沈んで行く。そして肉体を作る力となる。幼児にとって環境とは自分自身であり、自分を作る原動力の世界である。それ故、環境は喜びと安らぎと生命及び生命のリズムを感じさせるものであることが望ましい。幼児の周囲の大人はそういう環境を用意することを考えると共に、自分自身が一番大切な環境なのだということを意識せざるを得ない。

幼児は環境に依存し、自分からは環境を選べない。あるがままを受取る。しかし、幼児はただ無力なものでもない。一人一人が自分に必要なものを、それぞれのやり方で環境から受取って行く。又、環境である大人との相互作用の中で、幼児自身は無意識的なままで、幼児の持つ力を大人にも及ぼし、大人の意識を変化させることもある。大人は幼児にとってよい環境であろうとすることと共に、幼児の存在に対して敬意を持って見守ることも大切なのではないだろうか。

引用文献

- (1)R. シュタイナー 大西そよ子訳「精神科学の立場から見た子供の教育」1980 P25 人智学出版社
- (2)同上 P30
- (3)同上 P31
- (4)同上 P34
- (5)R. シュタイナー 高橋巖訳「教育の基礎としての一般人間学」創林社 1985 P129～P138
- (6)同上 P19～P37
- (7)津守真「子供の世界をどうみるか」日本放送出版協会 1987 P150～P157
- (8)同上 P166～P172
- (9)「一般人間学」P131～P132
- (10)平井信義「こどもの精神衛生」同文書院 1978 P119～P129
- (11)カール・ケーニッヒ「子どもが三つになるまで」そのだとしこ訳 葦書房 1992 3章